

テオフィル・ゴーチエ『アリア・マルセラ  
-ポンペイの思い出-』 (2)

メタデータ	言語: 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2023-12-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 響子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/0002000217">http://hdl.handle.net/10291/0002000217</a>

## テオフィル・ゴーチエ 『アリア・マルセラール・ポンペイの思い出』(2)

渡 辺 響 子 訳

オステリアのホールとして使われている部分にある、屋根のないポーチのような場所にテーブルがしつらえられた。石灰で洗われた壁には宿の主人の眼鏡にかなった下手な絵がいくつか掛けられていた。サルヴァートル・ロザ、エスパニョレ、騎士マッシモ<sup>1</sup>などと、ナポリ派の有名な画家たちの絵で、主人は自分が賞賛しなければならないと思い込んでいたのだった。

「尊敬すべきご主人」とファビオが言った。「御仁の雄弁をご披露されてもまったくの無駄骨ですよ。われわれはイギリス人じゃないから、昔の絵より若い女の子の方が好きなんでね。それより、おたくのぶどう酒リストをあそこにいる褐色の髪の美人に持ってこさせてくださいな。さっき階段のところにいるのを見た、ビロードのような目をしたあの娘にね」

パルフォリオ<sup>2</sup>は、このお客たちがフィリスタン<sup>3</sup>やブルジョア<sup>4</sup>といった騙されやすい種族には属していないと悟ると、画廊の自慢をするのはやめて酒蔵の自慢を始めた。まずは、最高のぶどう園のぶどう酒を軒並み揃えていると切り出した。シャトー・マルゴー、インド帰りのグラン・ラフィット、シレリ・ド・モエ、オック・メイエル、スカーレット・ワイン、ポルトとポルテ、アレ・エ・ジャンジャルベ、ラクリマクリスティー<sup>5</sup>の白と赤、カプリにファレルノ。

「なんだって！ファレルノのぶどう酒があるのか、このケダモノ！それなのにグラダラ御託を並べた最後に言うのか！われわれに堪え難いぶどう酒学

上の連禱を聞かせて苦しめやがって」とマックスは、ふざけて怒ったふりをしてしながら宿の主人の喉元に飛びかかって言った。「一体お前は地方色というものかわからないのか？じゃあ、この古代の地に住む資格がないんじゃないか？せめてうまいんだろうな、お前のファレルノのぶどう酒は？コンスル・プランキユスの時代にアンフォラ壺<sup>6</sup>に入れたのか？コンシュエレ・プランコ<sup>7</sup>だよ」

「コンスル・プランキユス様は存じておりませんし、うちのぶどう酒はアンフォラの壺にも入っておりませんが、年代物で、ひと瓶10カルランでございます」と主人が答えた。

日は落ちて、夜になっていた。澄んで透きとおった、ロンドンの真昼よりも確実に明るい夜だった。地には紺碧の色調があり、天には想像できないような甘やかな銀色の光があった。空気があまりにも穏やかなので、テーブルに置かれた蠟燭が揺らぐことさえなかった。

一人の少年が、笛を吹きながらテーブルに近づいてきた。そして食卓を囲む三人の目をじっと見ながら、浮き彫りによくあるあの立ち方のまま、優しく美しい調べの楽器に息を吹き込み、短調のカンティレーナ<sup>8</sup>を一節奏でた。その魅力は深く胸に沁み入るものだった。

もしかするとこの少年は、ドゥイリウス<sup>9</sup>の露払いをした笛師から直系でつながっているのかもしれない。

「僕らのご馳走は、なかなか古代風にアレンジできたね。足りないのはカディスの踊り子とキツタの花冠くらいじゃないか？」とファビオがファレルノのぶどう酒をなみなみと注ぎながら言った。

「デバ紙<sup>10</sup>の記事みたいにラテン語の引用をしたい気分になってきたぞ。オードの節が浮かんでくるんだ」とマックスも言う。

「やめろ、それは自分用にとっておけよ」とオクタヴィアンとファビオが慌てて叫んだ。「食事時のラテン語ほど消化に悪いものはないからな」

葉巻をくわえ、テーブルに肘をついて、空になった何本かの瓶を見つめる

若者の会話は、とりわけそれがまわりやすいぶどう酒の場合、ほどなく女性をめぐるとなる。一人ひとりが持論を繰り広げた。以下はそれをザッとまとめたものである。

ファビオは若さと美しか問題にしていなかった。享樂的で現世肯定主義者なので、幻想を抱くようなこともなく、恋愛においては一切偏見というものを持っていなかった。美しければ、農家の娘も公爵夫人と同じくらい気に入った。身にまとうドレスよりも中身の身体の方に心を奪われた。数メートルの絹やレースに恋する仲間を嗤い、そんな奴らは最新モード店のショーウィンドウに恋する方が理にかなっていると言っていた。実のところ極めて的を得たこうした意見を隠そうともしなかったせいで、世間ではエキセントリックな男として通っていた。

マックスは、ファビオほど芸術家肌ではなく、簡単にはいかなそうな計画や、複雑極まる情事しか好まなかった。抵抗されてそれを征服すること、誘惑すべき貞淑を求めて、恋愛をチェスの手合わせのように進め、長い時間考え込んだり、効果をわざと焦らしたり、不意打ちや、ポリープ並みの策略を仕掛けたりした。サロンに行くと、自分に一番興味がなさそうに見える女性をアタックする対象として選ぶのだった。反感から愛へと巧みに移行させることが、彼にとって至上の歓びなのだった。自分をはねつけようとする魂に對抗し、争う意志を屈服させて優位に立つことが、最も甘美なことであるように彼には思われたのだ。雨の日も、かんかん照りの日も雪の日も、過度の労力と何にもくじかれない熱意をもって、十中八九食べようとさえしないお粗末な獲物を追って平野を駆け回る狩人のように、マックスも、一旦獲物を捕まえると、もう興味を無くし、すぐに次の獲物を追いかけるのだった。

オクタヴィアンはといえば、現実には少しも惹かれないと打ち明けていた。ドゥムスティエ<sup>11</sup>のマドリガルのように百合の花や薔薇で捏ね上げた中学生の夢を見ているわけではなく、どんな美人のまわりにも、散文的であ

んざりする細部があるから、と言うのだった。勲章を身につけてくどくどと同じ話をする父親や、まがい物の豊かな髪に生花を挿した色目を使う母親、赤ら顔で、愛の告白をしようと機会を狙っている従兄弟たち、仔犬を愛でる笑うべき叔母たちなど。オラス・ヴェルネ<sup>12</sup>かドラロッシュ<sup>13</sup>の絵を模写したアクアチントの版画が寝室の壁にかかっていたら、もうそれだけで、生まれつつあった情熱は終わってしまうのだった。恋するというよりも詩的な性質なので、逢引のためには月夜のマッジョーレ湖のほとりにイゾラ・ベッラ<sup>14</sup>のテラスを求めた。恋人を平凡な生活の場から攫<sup>さら</sup>って星降る場面に連れていきたいと願った。だから、芸術や歴史によって保存された偉大な女性たちに不可能な情熱を抱き、次から次へと順番に夢中になった。ファウストのように、ヘレネーを愛し、何世紀もの時間の波が自分の元にまで、あしした人類の欲望と夢が崇高に具現化された存在を連れて来てくれることを望んだ。その形は卑近な目には見えないが、今も時空間の中で生きているのだから。自分だけのためにセミラミスやアスパジエ<sup>15</sup>、クレオパトラやディアヌ・ド・ポアチエ<sup>16</sup>、ジャンヌ・ダラゴン<sup>17</sup>などのいる後宮を作った。時には彫像に恋することもあった。ある日、美術館でミロのヴィーナスの前を通ったときなど、こう叫んだものだった。「ああ！誰が貴女に腕を返してくれるのか。その腕で私を貴女の胸に抱き寄せ、私をつぶしてしまうための腕を！」ローマでは、古代の墓から掘り出された豊かに編まれた髪を見て、奇妙な錯乱状態に陥った。大枚はたいて番人を買収し、その髪から2-3本を手に入れ、それを有能な催眠術師に託して、この髪を持ち主である死女の姿と影を呼び出そうと試みた。が、あまりにも長い年月が経っていたため、導きの霊気は蒸発してしまっていて、幻は永遠の夜から出てくることはなかった。

スチュージ博物館の展示ケースの前でファビオが見抜いた通り、アリウス・ディオメディスの屋敷の地下室から見つけられた例の鋳型はオクタヴィアンを刺激し、過ぎ去った過去の理想に向かって天翔るといふ、常識を越え

る飛躍を引き起こしたのだった。時間からも生からも逸脱することを心から望み、自らの魂をティトゥス帝の世紀に移そうとしたのだ。

マックスとファビオはそれぞれ寝室に引っ込み、ファレルノの美酒でやや頭も重くなっていたこともあって、間も無く眠ってしまった。オクタヴィアンは、頭の中に渦巻いている詩的な陶酔を野暮な酔いで乱したくないという想いから、目の前の自分のグラスを飲み干さずにいた時間もあって、神経の昂ぶりのせいで眠れそうにないと感じると、熱くなった額を冷やし、頭を落ち着かせようと、ゆっくりとした足取りでオステリアを出て行った。

足は知らず知らずのうちに、死都に入りこむ門へと彼を運んでいった。オクタヴィアンは、その門を閉ざす木製の門を外し、何も考えずに廢墟の中に入ってしまった。

月が、その白いあかりで蒼白い家々を照らし、銀色の光と蒼い陰で通りを二筋に分けていた。夜のこの光は、その控えめな色合いで、建物が痛んでいるのを目立たないようにしていた。昼間の太陽のむき出しの日差しの下でのようには、柱が欠けているのも正面にヒビが入っているのも、噴火のせいで屋根が崩れているのもわからなかった。失われてしまった部分も半濃痰で補われ、まるで絵画の素描にサッと加えられる筆致で感情を吹き込むように、突然の光が、崩れ落ちてしまったはずの全体を示していた。物言わぬ夜の精が、何か幻想的な生命を現わすために、化石と化した街を修復したかのようだった。

オクタヴィアンは何度か、暗い陰の中にぼんやりとした人の形が滑り込んでいくのを目にしたような気さえた。けれどもその影のような姿は、明るく照らされた場所に着くや否やスッと消えて無くなるのだった。小さくささやく声、聞き取れないくらいのごわめきが、しじまの中に漂っていた。われらが散歩者は最初、自分の目がちらついているせい、耳鳴りがしているせいなのだと思っていた… 目の錯覚だったかもしれないし、海風のささやきだったかもしれない。あるいは蜥蜴か蛇が、イラクサの間をすり抜けて逃げ

ていくところだったのかもしれない。というのも、自然の中ではすべてが、死さえもが生きているからだ。どんな音も、沈黙さえも生きているのだ。とはいえオクタヴィアンは、意に反して一種の不安を感じた。軽い戦慄をおぼえたのは冷たい夜風のせいだったかもしれないが、彼の肌を震わせた。二、三度振り向いてみた。誰もいないこの街で、さっきまでのように一人きりだという感じがしなかった。二人の友も自分と同じことを考えて、廃墟を通り抜けて自分を探しに来たのだろうか？ さっき垣間見た人影は、はっきりしない足音は、話をしながら歩いてきて、四つ辻で角を曲がって姿を消したマックスとファビオだったのか？ この解釈は、ごく自然に思われたが、オクタヴィアンは困惑しつつも、そうではないと思った。一方で、自分ながらに考える理屈にも納得できなかった。孤独と陰は、オクタヴィアンがその平安を乱している目に見えない存在で満ちていた。何かわからない神秘のさなかに飛び込んでしまっていて、その見えない存在たちは、オクタヴィアンが去るのを待って、また動き始めようとしているようだった。これが、彼の頭によぎった突飛な考えで、どこか広大な廃墟に夜居合わせたことのある人ならわかってくれるような、その時間と場所、不安な気持ちにさせるあまたのごとに照らし合わせると、いかにももっともらしく思われるのだった。

昼間気になっていたある家の前を通ると、その家は煌々と月明かりに照らされていた。破壊される前にはどんな状態だったのかを思い描こうとした柱廊が、欠けたところのない完璧な状態で見えた。ドーリア式の4本の柱に途中まで縦溝の装飾が施され、柱身は鉛丹の紅い色に染められたドレープのように包まれて多色装飾のサイマ<sup>18</sup>を支えていた。まるで装飾家が昨日仕上げたばかりのようだった。側面扉の上の壁にはラコニアの大型番犬<sup>モロス</sup>が蠟画法で仕上げられ、厳かな *Cave canem*<sup>19</sup> という言葉を添えられて絵に描いた怒りを見せつけながら月と訪問者に向かって吠えていた。入口の敷居にあるモザイクには、オスク<sup>20</sup>とラテンの文字で *Ave*<sup>21</sup> と書かれた語が友情のこもった挨拶を客人に送っていた。オークルと朱で塗られた外壁には一筋の亀

裂もなかった。家は一階分高くなっていて、瓦屋根には青銅のアクロテリオンがレースのように施されており、無傷のその横顔を軽やかな青空に映えさせていた。空にはすでに弱い光の星が現れていた。

見知らぬ建築家が午後から夕方にかけて行なった、この奇妙な修復は、オクタヴィアンを大いに悩ませた。この日の昼間に、この同じ家が、嘆かわしい廃墟の状態だったのを見たと確信していたのだから。不思議な修復家は非常なスピードで仕事を成し遂げていた。というのは周囲の住居も真新しい新築の様相を呈していたからだ。柱はすべて、柱頭をいただいていた。正面の輝くばかりの壁には石一つ、煉瓦一つ、スタッコの薄い層も、ペンキのひとひらも欠けてはいなかった。そしてペリスタイルの隙間から、カヴァディウム大理石の石盤の周りにピンクや白の月桂樹<sup>22</sup>、ミルト<sup>23</sup>や柘榴が花咲いているのが見えた。歴史家たちはみんな間違っていたのだ。噴火は起こらなかったのだ。でなければ、時の針が永遠という文字盤の上で、二十世紀もの時間を遡って逆回りしたのだ。

オクタヴィアンは、これ以上ないほど驚いて、自分が立ったまま眠っている夢の中を歩いているのかと考えた。狂気が自分の目の前で幻覚を踊らせているのではないかと真剣に自問してみた。けれども眠っているわけでも、気が触れたわけでもないと思えざるを得なかった。

空気の中に奇妙な変化が生じた。ばら色の波が、紫色のグラデーションを作りながら月の蒼い光に混じってきた。空の縁が明るくなってきた。まるで夜が明けるとかのようなようだった。オクタヴィアンは懐中時計を取り出した。真夜中だった。時計が止まってしまったのではないかと思い、反復ネジを押してみると、12回鳴った。たしかに真夜中だった。それなのに明るさはますます増していき、月は、どんどん眩しくなっていく蒼穹の中に溶けていった。太陽が登った。

するとオクタヴィアンは、もはや時間の観念が完全に混乱していたので、いま自分が歩いているのは、半分だけ死衣から引きずり出された死都ポンペ



イではなく、若く、無傷の生きたポンペイなのだと確信を持つことができた。この街の上には、ヴェスヴィオの焼けただれた泥の奔流など流れていないのだ。

信じがたい奇跡が十九世紀のフランス人である彼を、その心だけでなく現実、ティトゥスの時代に運んだのだ。でなければ過去の底から、壊滅した街を、消え去った住人もろとも彼のところまで運んできたのだ。というのも、古代風の服装の男性が一人、すぐ隣の家から出てきたのだから。

この男性は、短髪で髭を剃り、褐色のチュニックと灰色がかった上着を身にまとっていた。裾は、歩くのに邪魔にならないようたくし上げられていた。速い足取りで、ほとんど走るように歩き、オクタヴィアンに気も留めずに傍を過ぎて行った。エスパルトの籠を腕にさげ、ヌンディナリウム<sup>24</sup>の方に向かって行った。奴隷だ。市場に行くどこかのダヴス<sup>25</sup>だ。間違えようもない。

車輪の音が聞こえ、白い牛に曳かれ、野菜を載せた古代の荷車が道に入ってきた。繋がれた牛の横には脚をむき出しにした日に焼けた牛飼いが歩いていた。サンダルを履き、ゆったりとした麻のシャツのようなものをまとっていた。あご紐でとめた円錐形の帽子を背中に回していたので、今日ではお目にかかれないタイプの顔が見えた。狭い額には節ばった瘤のような皺があり、黒い髪は縮れていて鼻筋はまっすぐ。飼っている牛と同じように穏やかな目、それに田舎のヘラクレスといった首。彼は厳かに突き棒で牛たちに触れ、その姿勢はアングルを恍惚とさせそうな彫像のポーズだった。

牛飼いはオクタヴィアンを見て驚いたようだったが、そのまま進んでいった。自分には馴染みのないこの奇妙な人物の様子に説明が見つからないので一度後ろを振り返ったが、田舎の人間によくある穏やかな愚かさから、謎の言葉はもっと器用な人間に任せることにして道が続けた。

カンパニアの農夫たちも現れた。ぶどう酒を入れた皮袋を背に乗せ、青銅の鈴を鳴らしながら進むロバのあとを歩きながら。彼らの顔だちは、メダル

と安い硬貨が違っているくらい現代の農夫の顔つきとは違っていた。

街は、よくあるディオラマの絵のように、次第に人で溢れてきた。最初は誰もいないのに、光の効果が変わると、それまで見えていなかった人物が動き出す、ああした絵のように。

オクタヴィアンが感じた気持ちも、その性質を変えていた。さつき夜の惑わすような陰の中では、理性では説明のつかない心配になるような幻想的な状況のさなかにあって、どんなに勇敢な人でも身を守りきれない不安にとらわれていた。あの漠然とした恐怖は深い驚きに変わった。知覚がはっきりしているのに、自分の五感が体感していることを疑うことはできなかった。それでもやっぱり彼がいま目にしているのは、どうしても信じられないことだった。—まだ納得できていないので、自分が幻覚に弄ばれているのではないと証明するために、現実の細かいことを確認しようとした。—目の前を過ぎて行くのは亡霊ではなかった。なぜなら鮮やかな日の光がこれらの人物を疑いようのない現実感をもって照らしていたのだから。そして、朝の光で長く延びた彼らの影が歩道や壁に写っていたのだから。—自分に起きたことが一切わからないものの、最も大切な夢の一つが実現したことに心の底では大喜びで、もうこの冒険に抗おうとは思わなかった。あらゆる不思議を理解しようとはせず、そのまま受け止めたのだ。何か神秘的な力のおかげで、消えてしまった世紀の中で何時間か生きる機会を恵まれたのだから、理解不能な問題を解こうとして時間を無駄にするのはやめた。そして、これほど古く、同時に彼にとってはこんなにも新しい光景を、右、左と見つめながら勇気を出して歩き続けた。それにしても、ポンペイのどの時代に連れてこられたのだろう？壁に書かれた役所の告知に記された公人の名前を見て、ティトゥス帝の治世の初期だということがわかった。—今の暦で言えば79年だ。—すぐさま一つの想いがオクタヴィアンの頭をよぎった。ナポリの博物館でその胸の鑄型に魅了された例の女性が生きているはずだ。彼女が非業の死を遂げたヴェスヴィオの噴火は、その同じ年の8月24日に起きたのだから。では

彼女を見つけ、会って話をすることもできるのだ。一神々しい輪郭の周りでかたどられたあの灰を見て覚えた狂気じみた欲望が、もしかすると満たされるかもしれない。なぜなら、時間を後戻りさせ、永遠の砂時計の中で同じ時間を二度繰り返させる力を持った恋心に、できないことなど何一つないはずなのだから。

オクタヴィアンがこのような想いにふけていると、美しく若い娘たちが頭の上にバランスよく乗せた壺を白い指先で支えながら泉にやってきた。緋色の刺繍の縁取りのある白い長衣トーガをまとった貴族たちが、列をなす客につき従われながら広場フォーラムに向かってやってきた。買い物客たちは店の周りに押し寄せていた。店はすべて、彫琢され、色をつけられた看板で、それとわかるようになっていた。その小ささと形でアルジェのムーア式の店を思い出させた。こうした露店の上にはたいがい、色付けて *hic habitat felicitas* <sup>26</sup> と書かれた素焼きの男根が誇らしく掲げられ、邪眼 <sup>27</sup> に対する迷信的な用心があることを示していた。オクタヴィアンは、お守りの店まで見つけたが、その棚には角や、枝分かれしたサンゴの枝や、黄金の小さなプリアペなどが並べてあった。ちょうど今でもナポリで、邪眼から身を守るために売られているように。オクタヴィアンは、迷信は宗教よりも長く生き延びるのだな、と思った。

イギリス人が歩道を発案したなどとうそぶけないように、ポンペイのすべての道路に備わっている歩道を進んでいると、オクタヴィアンは美しい青年とぶつかりそうになった。彼とほぼ同じくらいの年齢で、サフラン色のチュニックを着て、カシミアのように柔らかい白い繊細な上着を身体に巻いていた。現代のぞっとしない帽子をかぶり、品のない黒いフロックコートでウエストを絞り、脚はパンタロンに閉じ込められて足も艶光りするブーツで締め付けられたオクタヴィアンの姿を見て、若きポンペイ人は驚いたようだった。もしわれわれが、ガン大通りで、羽飾りをつけ、熊の爪を首飾りにして派手な刺青を入れたアイオワ人 <sup>28</sup> かボトクド人 <sup>29</sup> を見たら肝を潰しただろ

うが、それと同じことだ。それでも、育ちのいい青年だったので、オクタヴィアンの前で哄笑するようなことはせず、このギリシャ＝ローマの街で迷子になった哀れな野蛮人を可哀想に思い、少し抑揚の強い優しい声でこう言った。

*Advena, salve* <sup>30</sup>

神々しくも権威に満ち、厳かなるティトゥス帝の治世に生きるポンペイの住人がラテン語で話すことほど自然なことはなかったのだが、それでも生きた人間の口からこの死んだ言語が出てくるのを聞くと、オクタヴィアンは身震いをした。ラテン語が得意だったこと、一般試験で賞を取った自分を褒めたいと思ったのはこの時だった。大学で学んだラテン語は、この唯一無二の機会に役に立ったのだ。教室でのことを思い出しながら彼は、ポンペイ人の挨拶に *De viris illustribus* 式の、*Selectae e profanis* 式 <sup>31</sup> のラテン語で答えた。一応わかりはするものの、パリ訛りもあったので、若者はやさしく微笑んだ。

「ギリシャ語の方が君には話しやすいのかな？」とポンペイの青年は言った。「アテネで勉強したからギリシャ語も話せるんだ」

「ギリシャ語はラテン語よりもっとダメなんだ」とオクタヴィアンは答えた。「僕はガリアから来たんだ。パリ、ルテシアからだよ」

「その国のことなら知ってるよ。ご先祖さまが、偉大なるカエサルの時代に戦争に行ったから。それにしても、なんて変な服装をしているの？ローマで見かけたガリア人たちは、そんな服装じゃなかったよ」

オクタヴィアンは、若きポンペイ人にユリウス・カエサルがガリアを征服してから二十世紀の時が流れて、流行も変わったのだとわからせようとしたが、ラテン語が出てこなかったし、本当のところ、そんなことはどうでもよかった。

「僕の名前はリュフェス・ホルコニウス <sup>32</sup>。僕の家は君の家だよ」と若者は言った。「居酒屋の方が気楽でいいと言うなら別だけどね。アウグストゥ

ス・フェリックス街の門の近くにあるアルピヌス亭とか第二塔近くにあるピュビリウスの息子がやっているサリヌスの旅籠<sup>33</sup>なんかは快適だよ。でも、よかったら、君がまだ知らないこの街を僕が案内するよ。—君が気に入ったよ、若き野蛮人くん。僕が信じやすいタチなので今の統治者ティトゥス帝が2000年も前に亡くなっていて、忌まわしい信奉者たちがタールを塗りたくってネロの庭を照らしたナザレ人が、ただ一人で、人のいない天に座していると信じさせようとしたけれどね。偉大なる神々はそこから墮ちたと言って。—Par Pollux! 」と彼は、通りの角にある朱色で書かれた告知に目をとめて言った。「ちょうどいい時に来たね。プロートの『カッシーナ』<sup>34</sup>をやってるよ。最近また演劇に復帰したんだ。変わった、滑稽な芝居だよ。パントマイムしかわからなかったとしても面白いと思うよ。ついておいで、もうすぐ時間だ。関係者と外国人用の席に座れるようにしてあげるから」

そしてリュフェス・ホルコニウスは昼間、三人の友が訪れていた小さな劇場の傍へと進んで行った。

フランスの青年とポンペイ市民は豊泉通り、劇場通りを通り過ぎ、学校とイシスの殿堂、彫像工房に沿って歩き、側面の入り口からオデオン劇場の中に入った。ホルコニウスの推薦のおかげで、オクタヴィアンは今で言う前舞台のボックス席に当たるプロセニウムに座ることができた。彼が席に着くやいなや、全員の目が注がれ、劇場の中に軽いざわめきが起った。その眼差しは好意的だった。

芝居はまだ始まっていなかった。そこでオクタヴィアンは劇場の中をじっくり見ることができた。半円を描く階段席は両側とも、ヴェスヴィオの溶岩に彫り込まれた素晴らしいライオンの足で仕上げられ、現代の劇場の平土間に当たるが、それよりずっと狭い、何もない空間から出発し、ギリシャ大理石のモザイクが敷き詰められていた。これより幅の広い階段席が先へと伸びながら特別なゾーンを作り、大劇場の主入口から始まる4つの階段が劇場のてっぺんへと続いて下の方の席よりもゆったりした5つのコーナーを区切っ

ていた。観客はチケットを持っていたが、そのチケットというのが象牙の薄板で、そこに番号と列を刻んでどの列の何番めかが示してあり、上演される戯曲の題名とその作者の名前も記されていて、容易に自分の席にたどり着けるようになっていた。司法官、貴族、既婚者に若者、ブロンズの兜が光るのが見える兵士などが、個別に区切られた列を占めていた。—美しい長衣や、綺麗に髷の入ったゆったりした白いマントが最前列に拡がって、その上の階にいる女性たちの様々な装いとコントラストを成しているのは見ものだった。庶民の灰色のケープは、屋根を支える柱の近くにある、上の階のベンチ席に追いやられ、隙間から、パンアテナイ祭の青い畑のような濃厚な青<sup>35</sup>を透けて見させた。サフランの香りをつけた水が、見えないほど細かい雫になってフリーズから雨のように滴り、空気を冷やすと同時に芳しくしていた。オクタヴィアンは、自分たちの劇場の、空気を悪くする鼻持ちならない匂いが充満する様を思った。あまりの悪臭のため、拷問の場とも思えるほどひどい自分たちの劇場。文明はさほど進歩していないものなのだと思った<sup>36</sup>。

横に長い梁から下がっていた幕がオーケストラの深みの中に沈み、楽師たちがそれぞれ各自の持ち場に着くと、グロテスクな服を着、兜のように設えられたいびつな仮面をかぶった前口上役が現れた。

前口上役は、観客に挨拶し、拍手を求めたあと、滑稽な理屈を言い始めた。「昔の芝居というのは時代を経て味わいを深めるぶどう酒のようなものですが、ご老体にはおなじみの『カッシーナ』は、お若いみなさんご存知でしょう。どんなお方にも喜んでいただける作品です。ある人はご存知だから。別の人はご存知ないから。それにこの芝居は心を込めて手を入れたものですから、心配事はみんな忘れて、自由な心で聴いていただかなければなりません。借金のこと取り立て屋のことも忘れてね。劇場で逮捕されるなんてことはありませんから。ある晴れた日のことでした。海鳥<sup>フルキオン</sup><sup>37</sup>が広場の上を飛んでおりました」そして、これから役者たちが演る芝居の分析を始めたが、微に入り細に入り分析するところを見ると、古代人が劇場で楽しむのに

は、意外性はあまり重要でなかったのだとわかる。美しき女奴隷カッシーナに恋する老いたスタリーノが、どうやって自分の農夫オランピオに彼女を嫁がせようとするかを語った。人のいい夫と、婚礼の夜に入れ替わろうというのだ。そしてスタリーノの妻のリコストラータが、放埒な夫の淫行に抗し、息子の愛を遂げさせようとしてカッシーナを侍臣のシャリヌスと結ばせようとするかを話して聞かせた。さらに、騙されたスタリーノが、女装した奴隷をどんな風にしてカッシーナだと思い込むかや、カッシーナは自分が生来自由な身であることを知り、相思相愛の若い主人と結婚することも語った。

若きフランス人は、ブロンズの口のついた仮面をつけた役者たちが舞台上で善処するのをぼんやりと見ていた。奴隷たちは急いでいるように見せかけるため、あちこち走り回っていた。老人は、頭をふりふり震える両手を前に差し伸べていた。声の大きい貫禄ある婦人は、気難しく尊大な様子でどしりと座り込み、夫に喧嘩をふっかけて場をおおいに沸かしていた。—これらの登場人物は役者の楽屋に通じる奥の壁に設えられた三つの扉から出たり入ったりしていた。—スタリーノの家は劇場の一角を占めており、旧友のアルセシムスの家はその正面にあった。これらの舞台背景は、きわめてうまく描かれてはいたが、場所そのものというよりは、場所の観念を表象するものだった。昔の劇場の広い舞台裏のようなものだ。

婚礼の盛儀が偽のカッシーナを舞台上に連れてくると、ホメロスが神の笑いとしたような哄笑が起こって大劇場のあらゆる長椅子を回っていった。割れんばかりの拍手が入り口のエコーを震わせた。けれどもオクタヴィアンはもはや聞いてもいなければ見てもいなかった。

女性たちが並んで座っている列の中に、驚くべき美しさの創造物があるのが目に止まったのだ。まさにこの瞬間から、彼の目を引いていた魅力的な顔はどれも、フェーベの前に空の星が霞んでしまったのと同様、陰に入ったように消えてしまった。すべてが見えなくなり、夢の中のように消えてしまった。人々がひしめいている階段席が霧でぼやけ、役者たちの甲高い声も果て

しなく遠ざかって届かなくなってしまうようだった。

オクタヴィアンは心臓に、電気ショックのようなものを受けたのだった。この女性の眼差しが自分の方に向けられたとき、彼には、その胸から火花が飛び散っているように見えたのだった。

その女性は色白で、波打ちカールした髪は、夜のように黒かった。その髪はギリシャ風にこめかみに向かって軽く結びあげられ、輝くようなマットな質感の顔には黒く優しい目がキラキラと輝いていた。その目は言いようのない官能的な寂しさと情熱的な倦怠の表情を帯びていた。口は尊大に口角が上がっていて、燃えるような深紅の生き生きとした熱情で、顔の穏やかな白さとコントラストをなしていた。首は、今では彫像でしか見られないあの純潔な美しい線を見せていた。腕は肩まであらわで、ばら色とモーヴの間の色をしたチュニックを持ち上げている誇り高い両胸の先から、フィディアスかクレオメヌスが大理石に彫琢したかと思うような二本の鬘が出ていた。

これほどまでに理想的な輪郭、清らかな曲線の胸を見て、オクタヴィアンは磁気的にかき乱された<sup>38</sup>。この丸みは、ナポリの博物館の、中が空洞になっている例の型に完璧に合致しているように思われた。彼を熱い夢想に投げ込んだ、あの型だ。心の奥で、ある声が叫んだ。この女性こそ、アリウス・ディオメデスの屋敷で、ヴェスヴィオの火山灰で窒息したあの女性なのだ。いったいどんな超常現象でこの女性が、生きてプロートの『カシーナ』の上演を観賞している姿を見ているのだろうか？納得できる説明を探そうとは思わなかった。そもそも自分だってどうしてここにいるのか？夢の中に、ずっと前に亡くなってしまった人が出てきて、死んでいるのにまるで生きているように動くのを受け入れるように、この女性の存在を受け入れた。だいたい感動の度が過ぎて、どんな理屈も考え及ばなかった。彼にとっては、時の車輪が轍から外れて、すべてに打ち勝った彼の欲望が、流れ去った幾世紀をも超えて自分の居場所を選んだのだ！今や、自分のキマイラ<sup>39</sup>と正面から向き合っていたのだ。最も捉えがたく、最も懐古的なキマイラと。



オクタヴィアンの生は、一挙に満たされた。

これほど落ち着いていて同時に情熱的な、これほどクールでありながら熱い、ずっと前に死んでいるのにこれほどイキイキしているこの顔を目の当たりにして、彼はいま自分が、最初で最後の恋の前に、至高の陶醉の盃の前にいるのだと理解した。これまでに愛したと思っていた女たちすべての思い出が、軽い影のように消えていくのを感じた。そしてこれまでの感情を消し去って、魂がまっさらになるのを感じた。

その間、例のポンペイの美女は、片方の掌を顎に添え、完全に舞台に気をとられているように見せながらオクタヴィアンに、夜のような目から放たれるヴェルヴェットの眼差しを投げかけた。その眼差しは、溶けた鉛のように重く、灼けた流れのように勢いよく彼のところに届いた。それから美女は、傍に座っていた少女の耳元に身をかがめた。

芝居が終わった。人混みが広い出口へと流れていった。オクタヴィアンは、案内をしてくれたホルコニウスの親切な世話を辞退し、一番近くにあった出口から外へ飛び出した。扉のところまで行かないうちに、誰かの手が腕の上に添えられ、女性の声が低い調子で、でも一言も逃さないような話し方でこう言った。

「ティシェ・ノヴォレジャ<sup>40</sup>と申す者でございます。アリウス・ディオメデス様のお嬢様、アリア・マルセラ様のお世話をしております。私のご主人様があなた様をお慕いなさっています。ついていらしてくださいませ」

アリア・マルセラは、腰まで裸の屈強な四人のシリア人が担ぐ輿に乗りこんだところだった。彼らの赤銅色の上半身は、太陽の光を受けて艶光りしていた。輿のカーテンが半分開き、いくつもの指輪をはめた白い手が、侍女の言葉を裏打ちするかのよう、オクタヴィアンに向かって親しげな合図を送ってきた。深紅の襷がまた落ちて閉ざされ、輿は奴隷たちの歩調に合わせて遠ざかっていった。

ティシェは、歩道と歩道を結ぶ飛び石の上に軽やかに足を乗せて進み、通

りを横切りながら、回り道をしてオクタヴィアンを導いた。街をよく知っているので正確に迷路を通り抜けて彼を案内することができるのだ。歩道の間を車の車輪が通っていく。オクタヴィアンは、発掘で露わになっていない、したがって完全に未知のポンペイの街並みを歩き回っているのだと理解した。他にもいろいろ奇妙なことがある中で、この不思議な状況にも彼は驚かなかった。もう何が起きても驚かないと決めていた。古道具屋だったら幸福のあまり気が変になりそうな、この古代の幻燈のさなかで、彼はもうアリア・マルセラの黒くて深い眼差しと、何世紀もの時間に打ち克ち、破壊そのものさえ保存しようとした、あの素晴らしい胸しか見ていなかった。

隠し扉のところに着くと、その扉はサッと開き、すぐにまた閉ざされた。気がつくときオクタヴィアンは、イオニア式の、半ばまで明るい黄色に塗られ、柱頭に赤と青の装飾が施された大理石の柱に囲まれた中庭にいた。ウマノズクサの花綱が、自然が作ったアラベスクのように、ハート型の大きな緑の葉を建物の張り出した部分に垂らしていた。さまざまな植物に囲まれた水盤の傍には、一羽のばら色のフラミンゴが片脚で立っていた。植物の花の中にある羽根でできた花だ。

気まぐれな建築や奇抜な風景を描いたフレスコ画が壁を飾っていた。オクタヴィアンは、こうした細部を一瞬見たただけだった。というのはティシェが彼を入浴係の奴隷に預け、古代の入浴のあらゆる繊細な儀式を受けさせたからだ。オクタヴィアンはジリジリした。温度の違う蒸気をいくつも浴び、ストリジデルで垢を擦られるのに耐え、化粧品や香りをつけられたオイルが自分の身体に塗られて流れるのを感じてから、白いチュニックを着せられ、反対側の扉のところにいるティシェを見つけた。ティシェはオクタヴィアンの手を取ると、極端なほど装飾の多い別の部屋へと連れて行った。

天井には清らかで確実なデッサン、弾けるような色彩、それに自由なタッチで、小器用なただの装飾家ではなく大画伯の作だとわかるような軍神マルスやヴィーナス、愛の神キューピッドが描かれていた。葉が茂る中で戯れる

鹿やウサギ、鳥で構成されたフリーズが、雲母大理石の擁壁の上方部に飾られていた。敷石のモザイクは、おそらくペルガモのソジムスの作かと思われる素晴らしい仕事で、本物かと思まがうほどの技術で饗宴の様子を表したレリーフだった。

部屋の奥にはビクリニウム、つまり二人用のベッドがあり、そこにアリア・マルセラが肘をついていた。官能的でありながら清澄な姿態で、パルテノン正面にあるフィディアスの横臥婦人像を思わせるようなポーズだった。真珠の縁取りが施された靴はベッドの下の方であって、大理石よりも白くて清らかな彼女の美しい裸足の足は、身体にかぶせたビシユス掛布の上に伸びていた。

天秤の形をし、それぞれの秤の上に真珠を乗せた二つのイヤリングが、彼女の蒼白い頬の横で光を受けて揺れていた。梨の形に長くしたいくつもの粒を支える金の首輪が、ギリシャブラックの刺繍を施した藁色のペプラムがしどけなく襷を作り、そこから半分見えていた胸の上で円を描いていた。漆黒の髪のところどころで、黒と金の髪飾りが見え隠れし、光っていた。劇場から戻って、お召し替えをしていたのだ。腕には、クレオパトラの腕に巻き付いていた蛇のように、宝石を目にはめ込んだ黄金の蛇が何周もとぐろを巻いて自分の尾を咬もうとしていた。

螺鈿や銀、象牙の象嵌がほどこされたグリフォン<sup>41</sup>脚の小さなテーブルが二人用ベッドのそばに置かれていて、金銀の皿や貴重な七宝の皿に盛られたさまざまな料理がたくさん乗っていた。そこには、羽根を敷き詰めた上に乗せられたファーズの鳥<sup>42</sup>や、本来同じ時期に見られるべくもないありとあらゆる種類の果物があつた。

こうしたすべてが、客人を迎える予定があつたと思わせるものだった。床には生花が撒かれ、ぶどう酒の壺は雪でいっぱい甕に沈められていた。

アリア・マルセラはオクタヴィアンに、二人用ベッドの自分の傍に来て身を横たえ、共に食事をするようにと合図を送った。一若者は驚きと恋心で半

ば狂ったようになって、短いチュニックを着た、髪は縮れたアジア系の小柄な奴隷たちが差し出す皿の中から、適当につまんで口に入れた。アリアは、食べはしなかったが、何度もミランの壺<sup>43</sup>を口に運んだ。凝固した血のような暗い赤色をしたぶどう酒で満たされた、乳白色の壺だ。ぶどう酒を飲むにつれ、何年間も鼓動していなかった胸から、その蒼白い頬に、ほのかなばら色の蒸気が昇ってきた。とはいえ、オクタヴィアンが盃を口に運ぼうとしたときにふと触れた彼女のあらわな腕は、蛇の皮か墓の大理石のようにひんやりしていた。

「ああ！あなたがスチュージ博物館で、私の形を残して固まった、泥の塊に立ち止まって見入ったときに」とアリアは、潤んだ長い視線をオクタヴィアンに向けながら言った。「あなたの想いが熱く私の方に飛んできたときに、卑しい人たちの目には見えないこの世界に漂っている私の魂は、それを感じたのです。信じる気持ちが神様を創り出し、愛が女を作るのです。もう愛されなくなったときに初めて人は本当に死ぬのです。あなたの欲望が私に生命を返してくれました。あなたの心の強い呼び声が、私たちふたりを隔てていた距離を無くしたのです」

この若い女性が示した愛の喚起力という考えは、オクタヴィアンの哲学的信条にぴったりはまった。われわれ読者も共有するのにやぶさかではない信条だ。

たしかに何も死なない。全ては永遠に存在している。どんな力を持ってしても、かつて一度でも存在したものが消滅することはない。事物の普遍的な大洋の中に落下した、あらゆる行為、あらゆる言葉、あらゆる形体、あらゆる思考は、そこで輪を描き、より大きな同心円となって永遠の果てまで届く<sup>44</sup>。物質的な形象は、卑しい者の目にとってのみ消えるのであって、その形から逃れ出た亡霊は、無限の中に棲みついているのである。空間の中でも誰も知らない場所で、パリスは今もヘレネーを攫<sup>さら</sup>い続けている。クレオパトラのガレー船は想像界のシドヌス<sup>45</sup>で、紺碧の青い帆を膨らませてい

る。情熱的で力強い精神の持ち主の中には、見かけの上では過ぎ去ってしまった何世紀という時間を自分の元まで引き寄せ、万人にとっては死んでしまっている人間を生き返らせることに成功した人もある。ファウストはティンダールの娘<sup>46</sup>を恋人とし、ハデスの神秘的な深淵の奥底から、自分のゴシックの城へと連れて行った。オクタヴィアンもまた、ティトゥス帝の治下で一日を生き、アリウス・ディオメデスの娘アリア・マルセラの愛を受けているのだった。今アリアは、すべての人にとっては破壊された都市にいて、古代のベッドの上で彼の傍に身を横たえているのだった。

「他の女性に対して嫌悪感を抱くことから」とオクタヴィアンは応えて言った。「煽動する星々のように何世紀もの果てから輝いている、あしたタイプの女性を思い描いては、抗いようもなく引き寄せられていく私は、時空を超えた愛し方しか自分にはできないのだということがわかっていました。私がずっと待っていたのはあなただったのです。そして、人間の好奇心のおかげで保存されていた、あの儂げな残骸が、磁気秘密によってあなたの魂と繋がらせてくれたのです。あなたが夢なのか現実なのか、亡霊なのか生きている女性なのか、わかりません。イクシオンのように、すれてしまった我が胸に、雲をかき抱いているのか、あさましい魔術に弄ばれているのかもわかりません。でも、よくわかっているのは、あなたが私の最初で最後の恋人だということです」

「アフロディーテの息子であるエロスが、今のあなたの約束を聞いていますように」と、恋人の肩に頭をそっと乗せながらアリアは言った。恋人は彼女を情熱的に抱擁しながら抱き上げた。「ああ！あなたのその若い胸に私を強く抱きしめて！熱い吐息で私を包み込んで！あんまり長い間愛を感じずにいたから寒い」オクタヴィアンは、自分の胸の上で、この美しい胸が上がったり下がったりするのを感じた。まさにこの日の朝、博物館のガラスを通してその形を称賛した、あの胸が。この美しい身体のみずみずしい冷たさがチュニックを通して彼を貫き、燃え上がらせた。情熱的にのけぞったアリ

アの頭から、金と黒の髪飾りがほどけ落ち、青い枕の上に黒い大河のように髪が拡がった。

奴隷たちがテーブルを持ち去ってしまっていた。もう口づけとため息の混じり合う音しか聞こえてこなかった。この愛の場面に無関心な、飼われているウズラが、モザイクの床の上で宴のお余りをついばみ、小さな声をあげていた。

突然、寢室を閉ざしていたカーテンの青銅の吊り輪がレールの上で滑り、ゆったりした茶色のマントを着た厳しい様相の老人が敷居のところの姿を見せた。その灰色の髭は、ナザレ人の髭と同じく二つに分けられていて、顔には苦行の疲れから、いく筋もの皺が刻み込まれているように見えた。襟元から小さな黒い木製の十字架が下がっていて、信仰に関して何ら疑う余地も残していなかった。当時まったくの新興宗教だった、キリストの弟子の宗派セクトに属していたのだ。

老人を見ると、アリア・マルセラは混乱して取り乱し、マントの襷の下に顔を隠した。敵に遭遇した小鳥が、避けることができないので、せめて敵を見る恐怖からは逃れようとして翼の下に頭を隠すように。一方オクタヴィアンは、肘をついて、幸福のさなかに闖入してきた、この腹立たしい人物を睨みつけた。

「アリア、アリアよ」と、その厳しい人物は、咎めるような口調で言った。「お前の一生ではまだ不品行をし足りないというのか、お前の穢らわしい恋情は、お前のものではない時代にまでしゃしゃり出てくるのか？ 生きている者をその場にそっとしておいてやれないのか？ お前の遺骸は、悔い改めないまま火山の火の雨で死んだ日から、いまだに冷めきっていないのか？ 二千年の間死んでいてもまだ冷静になれず、貪欲なお前の腕は、その大理石の、空っぽの胸に、お前の媚薬に酔い痴れた哀れな愚か者を引き寄せるのか？」

「アリウス様、お父様、どうか、あの陰気な宗教の名の下に、私をそんなに苦しめないでください。あれが私の宗教だったことは決してないのですか

ら。私は人生と若さ、美と欲びを愛する私たちの古代の神々を信奉しているのです。色のついていない虚無の中に私を送り返さないでください。愛が私に返してくれたこの生を享受させてください」

「黙れ、不屈き者。お前の神々のことは口にするな。あれは皆、悪魔だ。お前の不純な誘惑に繋がれたこの男を放してやるのだ。ただ一人の神がお決めになった生命の輪から引き出すようなことはしてやるな。お前のアジア、ローマ、ギリシャの愛人たちを引き連れて異教の古聖所<sup>47</sup>に戻るが良い。若きキリスト教徒よ、もしもあるがままの姿を目にしたら、アンブーズ<sup>48</sup>やポルキア<sup>49</sup>よりもおぞましく思えるに違いない、この溶岩のことは忘れなさい」

オクタヴィアンは蒼ざめ、恐怖で凍りついたまま何か話そうとした。が、ヴェルギリウスが言うように、声が喉に貼りついたままになって出てこなかった。

「言うことを聞くか、アリア？」と背の高い老人は命ずるような口調で叫んだ。

「いいえ、決して」とアリアは、目をキラキラさせ、鼻孔を膨らませ、唇を震わせながらオクタヴィアンの身体を、大理石のように冷たく硬い美しい彫像の腕でかき抱きながら答えた。怒りに満ちて、争いに激昂した彼女の美しさは、この至高の瞬間、超自然的なきらめきで輝いていた。それはまるで、若き恋人に、逃れようのない思い出を残すためであるかのようだった。

「ああ、困った子だ」と老人は続けた。「それでは最後の手段に出なければならぬのか。お前の虚無を、手で触れられる明白な状態にして、目が眩んでしまったこの子供に見えるようにしなければならぬのか」そして命令するような声で悪魔祓いの呪文を唱えたので、アリアの頬から、壺に入ったミランのぶどう酒が昇らせていた赤味がサッと消えた。

まさにその瞬間に、海沿いの村のどこか、あるいは山のつづれ織りの中に埋れた字のどこかから、アヴェマリアの遠い鐘を連打する、最初の音が聞こ

えてきた。

この音を聞くと、若い女性の胸が潰え、そこから断末魔のため息が漏れた。オクタヴィアンは、自分を抱いていた腕がピンと伸びるのを感じた。彼女を包んでいたドレープは、まるでそれまで支えていた輪郭が潰えたかのようにくしゃくしゃと丸まった。不幸な夜の散歩者が自分の傍で、宴のベッドの上で目にしたのは、もはや焼け焦げた骨数本と一つまみの灰が混じりあったものだけだった。その中には金の腕輪や宝石、アリウス・ディオメデスの屋敷を掘り返したら出てきたに違いない醜悪な残骸があるだけだった。

彼は恐ろしい叫び声をあげると気を失った。

老人は消えていた。太陽が昇り、さっきまであれほど華々しく飾り付けられていた部屋は、いまやバラバラになった廃墟でしかなかった。

マックスとファビオは、前夜の痛飲で深く眠ったあとで飛び起きた。ふたりが最初にしたのは、隣の寝室で寝ているはずの仲間を呼ぶことだった。旅先ではよくある、茶化すような大声で呼んでみた。オクタヴィアンは返事をしなかった。それもそのはずだ。ファビオとマックスは返事がないので、友の部屋に入っていく、ベッドが乱れていないのを見た。

「どっかの椅子で寝落ちしたんじゃないのか？ベッドまでたどり着けなくてさ」とファビオが言った。「オクタヴィアンときたら、あまり酒に強い方じゃないからな。それから残っていた酒精を朝の爽やかな空気で散らそうとも思って、朝早くから外に出て行ったんじゃないの？」

「でも、あいつはほとんど飲んでないぜ」と思慮深げにマックスが言った。「どうもおかしいぞ。探しに行こうよ」

二人の友は、ガイドに助けられながらポンペイの道という道、四つ辻や広場、路地を走り回り、オクタヴィアンが絵を模写したり看板を読み取ろうと夢中になっていそうなおもしろそうな家にはすべて入って行って、とうとう半ばくずおれた小さな部屋の、剥がれたモザイクの上で彼が気を失って伸びているのを見つけた。意識が戻るまでにずいぶん苦勞したが、意識がはっき



りしても彼は、何も説明しようとはせず、ただ、月明かりのポンペイを見たという気まぐれを起こして失神したのだが、もう大丈夫だと言うだけだった。

この小軍団は、来た時と同じ様に鉄道でナポリに戻った。マックスとファビオは、夜、サンカルロで、その時に流行っていた踊り子たちが飛び跳ねるバレエを双眼鏡を使って見ていた。アマリア・フェラリス<sup>50</sup>の髻に倣って、ガーゼのスカートの下にキュロットを穿き、ニンフの群れの踊りをしていたのだが、それがゾットするような緑色のカルソンで、毒蜘蛛に刺されたカエルのように見えた。オクタヴィアンは蒼い顔をし、目もすわって打ちのめされた様子をしていて、舞台の上で何が起きているかなど、頭にないようだった。あの夜の素晴らしいアヴァンチュールのあとでは、現実の生活感を取り戻すことがうまくできないでいるのだった。

ポンペイを訪れたあの日から、オクタヴィアンは陰気なメランコリーの餌食になっていた。友だちが上機嫌で冗談を言っても、憂鬱が薄れるどころかかえってひどくなるのだった。アリア・マルセラの姿が今も彼を離さず、幻想的な彼の艶福の悲しい結末も、その魅惑を壊すことはなかったのだ。

耐えられなくなって彼は、こっそりポンペイを再訪してみた。最初のときのように月明かりの下、突飛な希望に胸を震わせながら廃墟の中を歩いてみたのだが、再び幻覚を見ることはできなかった。石の上を逃げてゆく蜥蜴を見ただけ、怯えた夜の鳥が鳴くのが聞こえただけだった。友だちのリュフェス・ホルコニウスに出会うことも、もうなかった。ティシェが来て、か細い手を彼の腕にそっと乗せることもなかった。アリア・マルセラは、頑固に灰の中において、出て来ようとはしなかった。

すっかり絶望して、オクタヴィアンは最近、魅力的な若いイギリス女性と結婚した。彼に首ったけなのだ。妻にとって、彼は完璧。けれどもエレンは、何ものにも騙されることのない心の直観で、夫が別の女性を愛していると感じた。でも誰を？どんな有能なスパイも彼女に知らせることはできな

かった。オクタヴィアンは踊り子を囲ったりはしていないし、社交界でも女性たちに対して、凡庸なお世辞しか言わない。美しく婀娜っぽいことで名高いロシアのさる公女のあからさまなアプローチにさえ、しごく冷淡に応えた。夫の留守中にそっと開かれた秘密の抽斗も、エレンの疑う不実の証拠を示すことはなかった。ティベリウスの時代の自由人、アリウス・ディオメダスの娘マルセラに嫉妬すべきだなどと、どうして気づくことができただろう？

- 1 いずれも 17 世紀のナポリ派の画家。サルヴァトーレ・ロザ (1615-1673)、ホセ・デ・リベラ、通称「スペイン人」(1588-1656)、マッシモ・スタンツィオーネ、通称「騎士マッシモ」(1585-1656)。ロザは主に風景画や戦場の絵を描き、イギリスで高く評価されていた。後者 2 名はいずれもカラヴァッジオの影響を強く受けた宗教画で有名。リベラはスペインの黄金時代の代表的な画家だが、生涯のほとんどをナポリで過ごし、「ロ・スパニョレット」(小さなスペイン人)と呼ばれた。彼の活躍した時代、ナポリはスペイン副王の支配下にあった。よく知られているのは『えび足の少年』。スタンツィオーネは、ウルバヌス 8 世から騎士の称号を受けて以来、自ら「大騎士」と署名していた。いずれも世間的には「下手な絵」ではない。自身も画家を目指したことがあり、ドラクロワのようなロマン派的な絵を愛したゴーチエの、いわゆる古典的な絵に対する反感もあるだろうが、登場人物の若者たちの芸術への造詣の不足、絵の複製を飾るという宿の主人の「ブルジョア的」(十九世紀的な意味での)趣味の悪さを揶揄しているのだろう。
- 2 ミュッセの『火の栗』(1830) に出てくる宿屋の主人の名前。
- 3 もともとはヘブライ人と戦ったペリシテ人のことだが、十九世紀には、芸術を介さない俗物を指す語となった。
- 4 フィリスタン同様、文学や芸術を理解しない俗物を指す。ボードレールには「憐れなブルジョア」という詩もあるが、「ブルジョア」「食料品屋」は、当時俗物を指す普通名詞として使われていた。とりわけ、芸術を理解しないのに口出しする無粋な存在として文学作品の中で使われることが多い。
- 5 日本でも見かけるが、元来はヴェスヴィオの斜面で栽培された葡萄から作られる甘口のワイン。名前の由来はミュッセの『マリアヌスの気まぐれ』(1833) 第二幕情景 1 の「ラクリマクリスティーをご所望で？」という台詞から。
- 6 古代ギリシャ・ローマの、両側につ手のついた壺。ワインの単位にも使用されるほど一般的だった。ギリシャでは 19.7 リットルなのに対してローマでは 25.5

リトルと異なっているのも興味深い。

- 7 この表現はホラチウスの中にあり、反抗的な自身の青春への暗示になっている(『オード III, 14, 28』)。また、バイロンの『ドン・ジュアン』(第一の詩、CCXII)にも引かれている。Munatius Plancus はカエサルと共にガリアに来ており、リオンは彼によって開かれたとされている。
- 8 本来は中世の世俗の音楽を指す。
- 9 ネポス・ドゥイリウスは、紀元前 260 年、第一次ポエニ戦争の際、ミラエの海戦でカルタゴを破った古代ローマのコンスル。
- 10 「デバ」は、1789 年創刊のフランスの新聞。その後の体制の変化にもかかわらず、廃刊に追い込まれることはなかった。いわゆる政府の御用新聞。ゴーチエの代表作の一つである『モーパン嬢』(1830)の有名な序文は、長々と「芸術のための芸術」を諧謔的な文章で謳ったあと、最後の最後にこう結んでいる。『モーパン嬢』は、「デバ紙あるいはフランス新聞で、ベッサリヤや糊の効いたカラー、半永久的に使える哺乳瓶、政府が唯一公認した胸に塗る練薬や、こしけ対策の薬の処方箋などの間に 3 行広告を出す価値はあるだろう」。
- 11 18 世紀の劇作家。Charles-Albert Demoustier 1760-1801.
- 12 Horace Vernet 1789-1863. ゴーチエは、この画家を、大衆に迎合する悪趣味な画家の代表とみなしていた。 *La Presse*, 18 mars 1845.
- 13 Paul Delaroche 1797-1856. ユゴーやドラクロワの壮大な運動をかわして「ブルジョワ的」ロマン派に変えてしまった画家と記している。 *L'Artiste*, 15 février 1857.
- 14 ドイツの作家 Johann Paul Friedrich Richter (1763-1825) の「心だけを求め、イギリス式庭園もオペラ・セリアも、モーツアルトの音楽もラファエロの絵も、月食も月光さえも、小説の一場面も求めないものは幸いなるかな！」 *Firmin-Didot*, 1829. を踏まえて、「マジジョーレ湖のゴンドラもイゾラ・ベッラの逢引も求めるな」という文章が『金羊毛』にも見られる。
- 15 ベリクレスの愛人。
- 16 アンリ 2 世の愛人。1599-1566. トゥールの城の庭園で有名。
- 17 スペイン王の私生児。1500-1577. 美しいだけでなく勇敢だったことでも知られる。ルーヴルにラファエロによる肖像画がある。
- 18 軒蛇腹の上部を装飾する反曲線を描く波形にえぐられた型。
- 19 猛犬注意の意。実際にポンペイの廃墟から発掘されたこのモザイクは有名。
- 20 南イタリアに住んでいた古代の民族の言語。
- 21 ようこそ、の意。
- 22 月桂樹の枝は、もちろん勝利の象徴である。花が問題になる時、とりわけ「ピンクの月桂樹」というのは日本では西洋夾竹桃のことで、あまり高貴なイメージがしない。

- 23 没薬とも訳される。東アフリカのカンラン科の植物からとる樹脂。香料や薬剤に用いられる貴重なもので、イエス・キリストの生誕の際に東方の三博士が贈り物として捧げた。
- 24 市場の立つ広場。
- 25 古代の喜劇に出てくる狡知に長けた奴隷の名前。のちのアルレッキーノやスカパンの先祖的な存在。
- 26 この文字も装飾も実際にポンペイにあったとされる。スタンダールも同様のものを見ていて、それは売春宿であったと『ローマ旅行記』(1828年6月28日)に記している。
- 27 このあと *La Jettatura* (邪眼) という作品を書くゴーチエは、実際にその存在を信じていた。目には見えない親愛や反発の気持ちが光線のように人から発して、愛撫しあったり攻撃しあったりするのだと考えていた。
- 28 周知の通り、アメリカン・インディアンの一部族。パリの博覧会に12人が「展示」された記録がある。ゴーチエはこのことを1845年5月19日の「ラ・プレス」紙と6月20日の「ラ・ルヴェ・ピトレスク」に発表している。
- 29 ブラジルのインディアン。
- 30 「異邦人よ、こんにちは」といった意味合い。
- 31 前者は18世紀の文法家ロモン司祭の教科書。後者はラテン語作家の作品とギリシャ文学のラテン語訳のアンソロジー。ロモンは、パリのパンテオン裏の道路にその名を残している。
- 32 ポンペイの書類に頻繁に出てくる護民官の名前。
- 33 いずれもロマネリの『ポンペイ旅行記』に出てくる。
- 34 Titus Maccius Plautus は、紀元前184年ごろに没した劇作家。20本ほどの作品が知られており、役者兼演出家でもあった。借金のために奴隷の身分にまで身をやつしていたのを、芝居の評判のおかげで立ち直った。
- 35 バルテノンの神殿にあるフリーズは、今では色を失っているが、元の色は青だったという。
- 36 ここでは控えめな表現になっているが、もちろん真意は昔の方がはるかに洗練されていた、ということである。『モーパン嬢』序文では、延々とその考えが展開され、1830年代当時の合言葉であった「進歩」がいかにくだららないか、ユーモアを交えながらも辛辣に論じている。
- 37 ギリシャ神話では、アルキオン、もしくはアルキユオネ。冬至の頃に海上の波風を鎮めるといふ伝説の鳥。もともとは溺死した夫を悼んで嘆く妻を哀れに思った神々が、二人をカワセミに変えたという。
- 38 ゴーチエは、メスメルなどの動物磁気説を本気で信じていた。この点については改めて考察したい。
- 39 今日では単純に妄想、空想、突飛な思いつきなどを指す語だが、もともとは

- リシャ神話で頭はライオン、胴は山羊、尾は蛇の尾で、口から火を吹く想像上の動物。ここでは元の意味の方で取る方が好ましく思われる。
- 40 ポンペイの墓地に、この名の墓がある。厳密には、ゴーチエは Tyché Novoleja と書いており、墓碑銘は最後の a のない Novolej という印字。
- 41 猫足のバスタブのようなもののグリフォン版。グリフォンは、やはりギリシャ神話に出てくる怪物で、胴体はライオン、頭と翼は鷲。
- 42 雉の一種。名の由来はファーズ河。
- 43 この壺については、プリニウスが『博物誌』で長い記述を割いている。瑪瑙か蛍石と思しき石で作られたもので、ポンペイウスの勝利を祝して紀元前 61 年に東洋からローマに輸入されたもの。ネロも巨額を払ってこれを手に入れ、プリニウスはこの壺を狂気の沙汰の贅沢と記している。
- 44 ゲーテの『ファウスト』に寄せたネルヴァルの序文にも、類似の考えが展開されている。
- 45 小アジアの大河。プルタークによれば、クレオパトラとアントニウスが出逢った場所。
- 46 ヘレネーのこと。『ファウスト』の中に該当箇所が出てくる。
- 47 地獄の辺境。旧約時代の善人が、キリストの降臨まで待機する場所。洗礼を受ける前に世を去った子供の居場所ともされる。いずれにしても最後の審判までの日々を待つ場所で、キリスト教的な語彙。「異教の」という形容詞とは本来結びつかず、この老人の考えを如実に示している。
- 48 一本がロバの脚、もう一本が青銅の脚の雌の怪物。餌食と交わったあとにその相手を貪り食うとされる。
- 49 海神ポルキスの娘または姉妹とされる。ゴルゴーンと呼ばれることの方が多いが、ネルヴァルが訳した『ファウスト』中に出てくるこちらの名称をゴーチエは採用した。
- 50 実在のバレリーナで、この時期ナポリのサンカルロ劇場と契約を結んでおり、ゴーチエも上演を観たかもしれない。このバレリーナは、1858年にパリで、ゴーチエのバレエ『シャクンタラ』の主役を踊ることになる。

Théophile Gautier, *Arria Marcella — Souvenir de Pompéi* — (1852)

In *Théophile Gautier, œuvres*, édition établie par Paolo Tortonese, Robert Lafont, (Bouquins) 2011. を底本とした。